2024年12月

損保９条の会は沖縄平和ツアーを企画しました
沖縄戦を見つめ、戦争の悲惨さを実地で学び平和の大切さを心に落とし込み、命こそ宝（ぬちどうたから）の思いを個々の行動の基本にすえたいと思います

ぬち　どう　たから

命どう宝

損保９条の会の１３名は２０２４年１１月３０日（土）から１２月１日（日）の二日間、第二次大戦で国内唯一の地上戦が行われ住民と米軍を含む２３万人が死亡した中部・南部地域の九条の碑、戦跡地、米軍基地を訪問しました。
（旅程表は別紙の通りです）

ひめゆりの塔　慰霊碑の前で

沖縄戦とはどういう戦争だったのか

沖縄戦概要（南城市作成チラシより）

沖縄戦とは、太平洋戦争の最終段階、１９４５年３月から７月までのたたかいを言う。太平洋の島々で劣勢となった日本軍は米軍が沖縄に上陸するとみて、米軍を沖縄に「クギ付け」にする作戦を選択、それは本土決戦を準備するための時間稼ぎであり「捨て石」作戦だった。このため、沖縄は唯一の地上戦の場となり、住民が根こそぎ動員された。

４月１日、沖縄本島中部に上陸した米軍は首里の司令部を目指して南下、米軍の圧倒的な戦力に日本軍は首里司令部を放棄し南部へ移動、数万人の一般住民が「鉄の暴風」に巻き込まれ悲惨な結末を迎える結果となった。

６月２３日、牛島司令官の自決により組織的戦闘は終了するものの、戦闘継続を求める同司令官の自決前の命令の下、各地でゲリラ的戦闘が続いた。この間、捕虜になることを戒められていたため死を選んだ住民、軍から自決を求められた住民も多い。軍は住民を守ることはなかった。

９０日間に及ぶ沖縄戦で日本軍の兵９万４千人、住民９万４千人、米兵１万２千人が犠牲となった。沖縄出身兵や強制移住地での病死住民も含め県の人口の４人に一人が亡くなったことになる。

天皇制・国体を守るためには沖縄での人の死は、鴻毛より軽かった（佐事さん曰く）

旧陸軍病院跡　南風原壕群付近で読む

鎮魂

額づけば
戦友葬りし
日のごとく
夜明けの丘に
土の香匂ふ

両の足
失いし兵
病院を
探して泥道
這ひずり
来たる

魂魄の塔に刻まれた歌

和魂と　なりてしずまる
おくつきの
み床の上を　わたる潮風

（戦争で亡くなった人々が穏やかに眠る地、そこに優しく吹く潮風）

歌人翁長助静さんの作
翁長さんは前知事
翁長雄志氏の父君

平和記念公園の刻銘碑

日本人、外国人の別なく、軍人・民間人の別なく、全ての戦争で亡くなった人の名前を刻銘している

新城さんの解説を聞く参加者

糸数アブチラガマで新城ガイドの説明を聞く参加者

もともと糸数の住民の避難場所だったガマ（壕）を軍が地下陣地として使用、その後陸軍病院の分室となり、軍医とともにひめゆり学徒も合流、多い時で６００名の負傷者を収容した。

米軍接近後は重傷者や住民約２００人を置き去りに軍は退去し、動けない患者用に手りゅう弾や青酸カリが残された。

米軍により入口を閉鎖されたり手りゅう弾を投げ込まれたり、あらゆる攻撃を受け多くの人が亡くなった。

ひめゆり学徒は重傷者の看護・介護や排せつの世話など、漆黒の暗闇と悪臭がたちこめるなか、米軍の攻撃に耐えながら想像を絶する奮闘をしたという。

九条の碑を巡る

沖縄県には８か所に「九条の碑」があります。全国的には北海道から沖縄までおおよそ４０か所に碑があるようですから非常に「密度が濃い」と言えます。今回の旅程の中で三か所、また追加日程で一部の参加者は西原町の九条の碑を訪問しました。

← 左の九条の碑は
与儀公園にあり日本初の碑
↓←左下の九条の碑は
南風原壕群20号近くの碑
↓ 下の九条の碑は
読谷村の役場前の碑

ひめゆりの塔は沖縄師範女子部と県立第一高女からなる「ひめゆり学徒隊」２４０名の内、亡くなった２０６名の慰霊塔（紙面トップの全員写真の場所）です。

その後方に「ひめゆり平和記念資料館」があります。平和記念資料館では遺留品の展示や生き残った同窓生の証言が生々しく紹介され戦争の実相を知ることができます。

見学者･訪問者は若者が多いぞ！

特筆するべきことですが、ひめゆりの塔や平和記念資料館では２０代・３０代と思われる人々が大宗を占めていました。熱心に展示やビデオを視聴し、メッセージの紙面を読んでいる姿に、若者の関心の深さ・広がりを感じました。

ひめゆりの塔近くのガジュマルの木

読谷村役場の敷地
とっくりきわだの花

白梅之塔

白梅之塔、極限の中での看護の果てに

沖縄県立第二高女の４年生５５人も看護隊へ動員され、負傷兵の看護、排せつの世話に従事、敗色濃厚の中での解散命令の後、爆死・焼死・自決の結末。塔は先生・同窓生等１３２人を慰霊する。

遠望した米軍基地二つ

世界一危険な**普天間飛行場**。海兵隊の殴り込み部隊常駐。オスプレイが右上方に駐機。

約２０平方キロと広大な空軍**嘉手納基地**。極東最大の規模で、新宿区がすっぽり入る広さ。

79年前、米軍上陸の辺り（北谷町・読谷村）

北谷町の米軍上陸ビーチ

（巻貝“ちんぼらぁ”は見つからず）

読谷村は米軍上陸の地。砲撃と射撃を受け多くの死傷者を出す。

村役場の壁に、「日米地位協定を抜本的に見直せ、オスプレイ配備反対」の垂れ幕が。

いま人口は４１０００人超、村としては全国で最も人口が多い。

読谷村の役場前慰霊碑

着々すすむ自衛隊の米軍補完

勝連分屯地では２４年３月、地対艦ミサイル発射機を搬入、地対艦ミサイル部隊発足は本島では初めて。

立ち入り禁止の看板付近から見上げる丘の上には建設中の基地建屋が見える。

参考資料 「日米地位協定を考える」

沖縄県作成「沖縄から伝えたい。米軍基地の話。」から抜粋

日米地位協定は、在日米軍による施設・区域の使用を認めた日米安全保障条約第６条を受けて、施設・区域の使用にあり方や日本における米軍の地位について定めた条約です。

具体的には、施設・区域の提供、米軍の管理権、日本国の租税等の適用除外、刑事裁判権、民事裁判権、日米両国の経費負担、日米合同委員会の設置等が定められています。

「日米地位協定を抜本的に見直せ！」と要求を続ける読谷村

日米地位協定は、人権や環境問題などに対する意識の高まり等の中で、時代の要求や国民の要望にそぐわないものとなっており、刑事裁判権、米軍の管理権としての基地使用のあり方、環境汚染など、様々な問題点が指摘されていますが、昭和３５年（１９６０年）に締結されて以降、改定は一度も行われていません。

政府は、米軍及び在日米軍施設・区域を巡る問題を解決するためには、日米地位協定の運用の改善によって対応していくことが合理的であると説明しています。

沖縄県としては、米軍基地をめぐる諸問題の解決を図るためには、米側に裁量をゆだねる形となる運用の改善だけでは不十分であり、地位協定の抜本的な見直しが必要であると考えており、国に対して毎年度要請を行っています。

大交流会は盛会でした

ツアー初日の大交流会には、非常に熱心にガイド・資料提供いただいた沖縄原水協事務局長の佐事安夫さん。ツアーの計画段階から絶大なご支援をいただいた元全損保東京地協書記で、現在はあけぼの出版社（那覇）経営の大城辰彦さん。このお二方に加え地元大同火災ＯＢの上間優さん・前里清光さん・桑江良尚さんにも合流いただき、総勢１８名で大いに盛り上がり交流が進みました。

交流会は「海のちんぼらぁ」にて。ちんぼらぁ、とは沖縄の海岸に生息する巻貝の名前、いまは数が減っているとか。

熱心なガイドをしていただいた佐事さん。

元豊見城村会議員、マラソンランナー、三線など多趣味・多才。

お忙しい中、全旅程にご一緒いただいた大城さん。

元沖縄県中小企業家同友会専務理事のご経歴も。

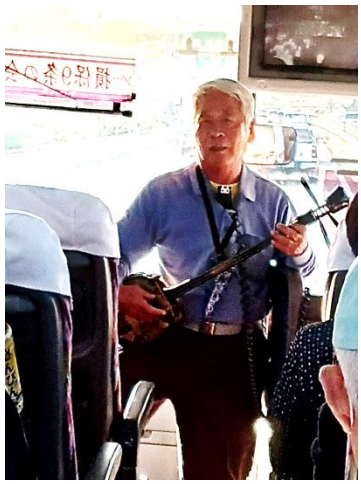
佐事さんの三線と民謡

佐事さん、バスの中で三線と島の歌を披露

多趣味と多才の佐事さん、バスの中でお生まれの波照間島の歌などを披露していただきました。思い出に残ります。

「うちなーぐち」

沖縄県は本島でも地方により固有の言葉があり、また島々はそれぞれの歌も方言もあるとのこと。沖縄の人は「あいうえお」の「えお」は話さないので、弟は「うぅと」、三線は「さんしん」というと。



以降は個々の追加日程の中での写真を紹介します

辺野古から

辺野古の抗議の座り込み現場、３８０２日目。ここにツアー参加者からのカンパを行う。１０年経過の不屈の行動。

本島北端辺戸岬から

祖国復帰闘争碑

全国の そして全世界の友人へ贈る

吹き渡る風の音に　耳を傾けよ
権力に抗し　復帰をなし遂げた　大衆の乾杯の声だ
打ち寄せる　波濤の響きを聞け
戦争を拒み平和と人間解放を闘う大衆の雄叫びだ
　鉄の暴風やみ平和の訪れを信じた沖縄県民は
　米軍占領に引き続き　１９５２年４月２８日
　サンフランシスコ「平和」条約第３条により
　屈辱的な米国支配の鉄鎖に繋がれた
米国の支配は傲慢で　県民の自由と人権を蹂躙した
祖国日本は海の彼方に遠く　沖縄県民の声は空しく消えた
われわれの闘いは　蟷螂の斧に擬された
　しかし独立と平和を闘う世界の人々との連帯であることを信じ
　全国民に呼びかけ　全世界の人々に訴えた
見よ　平和にたたずまう宜名真の里から
２７度線を断つ小舟は船出し
舷々相寄り勝利を誓う大海上大会に発展したのだ
　今踏まえている 土こそ
　辺戸区民の真心によって成る冲天の大焚火の大地なのだ
１９７２年５月１５日　おきなわの祖国復帰は実現した
しかし県民の平和への願いは叶えられず
日米国家権力の恣意のまま　軍事強化に逆用された
　しかるが故に この碑は
　喜びを表明するためにあるのでもなく
　ましてや勝利を記念するためにあるのでもない
闘いをふり返り　大衆が信じ合い
自らの力を確め合い決意を新たにし合うためにこそあり
　人類が　永遠に生存し
　生きとし生けるものが　自然の摂理の下に
　生きながらえ得るために警鐘を鳴らさんとしてある

居酒屋に現れた**島唄のお兄さん**。なかなかうまい。「涙そうそう」他数曲。

♪♪

古いアルバムめくり
ありがとうとつぶやいた
いつもいつも胸の中　励ましてくれる人よ
晴れ渡る日も雨の日も　浮かぶあの笑顔
想いで遠くあせても
おもかげ探して
よみがえる日は
涙そうそう

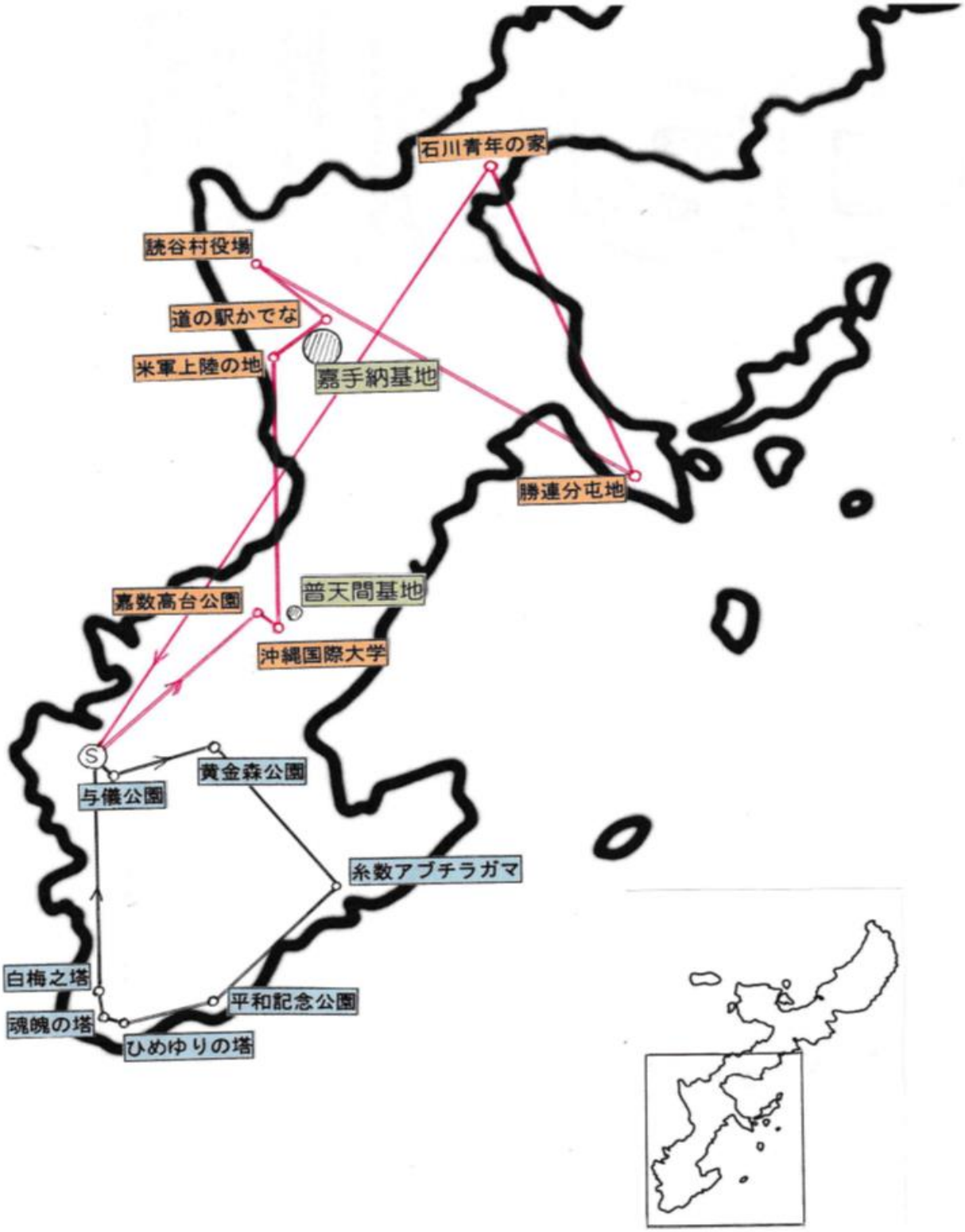
♪♪

沖縄平和ツアー行程表（2024年11月30日ー12月1日）

第一日			
与儀公園九条の碑	那覇市与儀	日本最初の九条の碑	１９８５年建立。県内８つの碑のさきがけ。
黄金森公園⇒陸軍病院壕	南風原町	九条の碑	旧沖縄陸軍病院跡、南風原壕群２０号。映画「ひめゆり塔」の舞台
糸数アブチラガマ	南城市玉城	旧南風原陸軍病院分室	全長２７０m、住民避難場所が病院の分室となり、搬入された負傷兵６００人、戦局悪化し重症患者を置き去りにして軍は撤退。住民・ひめゆり学徒の悲惨な逃避行。
平和記念公園	糸満市摩文仁	平和記念資料館、平和の礎、慰霊碑	日本軍終焉の地。慰霊碑には日本人２３万、外国人２万弱の刻銘がある。（うち沖縄出身１５万人弱）
ひめゆりの塔	糸満市伊原	慰霊碑（納骨堂）、資料館	沖縄師範学校女子部及び県立第一高女の生徒２２２名が「ひめゆり学徒隊」として傷病兵の看護に動員され、過半数が死亡。 生き残った元生徒の証言が極めて生々しい。
魂魄の塔	糸満市	慰霊碑	敗戦直後に住民が遺骨収集班を結成、一帯に散らばった遺骨３万５千柱をおさめ建立。北海道・和歌山・大分等の碑も。
白梅之塔	糸満市	慰霊碑	県立第二高女の生徒からなる「白梅学徒隊」の最後の場所に立つ慰霊碑。動員１５０名中、８割近くが亡くなる。

第二日			
嘉数高台公園	宜野湾市嘉数	慰霊の塔、展望台、日本軍のトーチカ	上陸した米軍との１６日間の戦闘で、米兵に「死の罠」「忌まわしい丘」と言わしめた大激戦地。トーチカに残る弾痕、普天間基地を展望する。
沖縄国際大学	宜野湾市宜野湾	元大学本館、事故跡とモニュメント	２００４年米軍大型輸送ヘリの墜落・炎上現場。日米地位協定の壁の下、メディアも警察も消防隊ですら立ち入りを拒否された。
米軍上陸の地	北谷町砂辺	砂浜とモニュメント	日本軍の予想に反して、読谷・北谷海岸一帯に艦船１４００－１５００隻、兵員１８万３千人の大軍で一気に無血上陸。
道の駅かでな	嘉手納町屋良	展望デッキと資料室	展望デッキから嘉手納基地を一望。一周２０キロを超える広大な基地。
読谷村役場	読谷村座喜味	九条の碑	役場の建物には「**日米地位協定を抜本的に見直せ、オスプレイ配備反対**」の大書きの看板が。
勝連分屯地	うるま市勝連	分屯地を遠望	２０２４年３月、地対艦ミサイル発射機を搬入。地対艦ミサイル部隊の発足は沖縄本島では初。
石川青少年の家近く	うるま市石川	東山ＣＣゴルフ場跡地	ゴルフ場跡地に自衛隊のヘリ離着陸や空包射撃、夜間戦闘などを行う訓練場を計画。県・市議会と住民の反対で計画を断念させる。

沖縄平和ツアー行程のルート



記録係のつぶやき

朽ちずに残るアカギの先端

沖縄国際大学の校舎横の焼け焦げたアカギが２００４年の米軍ヘリの墜落現場のモニュメントとして残されています。

事故直後、米軍関係者が現場を封鎖し、事故機を搬出するまで日本の警察・消防・行政・大学関係者・メディアなどすべての関係者が現場に立ち入れませんでした。米軍関係者の「ゲット・アウト・オブ・ヒャー！」（ここから出てゆけ）の大声が当時のテレビ画像の記憶として残ります。

日米地位協定では米軍の財産（この時はヘリの残骸）に対する捜査権が日本にありません。ヘリ積載の放射性物質による汚染疑惑も米軍が現場の土壌まで持ち去ったことで詳細は解明されませんでした。助かった乗組員への事情聴取もできません。

ツアーから帰宅した翌日１２月３日付の朝日新聞が、沖縄の海兵隊員が１２月２日、リサイクルショップで万引きをし、呼び止めた警備員の足を蹴って全治４週間のけがを負わせたという事件を報道しています。強盗傷害事件です。１９歳の男は「米軍の管理下に置かれており、日本側は身柄の引き渡しを求めていない」としています。

刑事も民事も事故・事件を調査し裁く権限が阻害されています。

ことは沖縄だけの問題ではありません。全国の基地周辺地域では、騒音問題をはじめ、飛行機自体や飛行機からの部品の落下、基地からの有害物質が水道を汚染することによる健康被害など、さまざまな問題が発生しています。

石破首相は本年９月の自民党の総裁選で日米地位協定の改定に言及しました。日本は「独立した主権国家」「対等な日米関係」を目指すと総選挙前の党首討論でも明言しました。

今回の沖縄ツアーで少なくとも私たちは、日米の健全な関係の構築の必要性をより深く再実感しました。